

# 学会・研究会だより

## 日本学術会議で日中文化交流懇談会開かる

一月十三日、学術会議において、昨年一月廿八日の「ソ連・中国と学術的交流の途をひらくこと」の決議（前号に全文収録）にちとずき、上述の会をもちった。

出席者は、龜山会長、我妻副会長、平野会員の他、学界から倉石東大教授、幼方中研理事、兼界から布川角左エ門氏（岩波書店）田中乾郎氏（文求堂）内山完造氏（内山書店）熊井氏（文部省情報室）で、会中研所長平野義太郎氏が近く北京に出発する機会に、前記の決議をいかに具体化するかについて種々懇談し、さしあたり日本学術会議が中国科学院と学術出版物を交換したい希望を平野会員を通じて正式に依頼すること、これに關する日本側の事務は学術会議を中心として学術振興会も援助することに決定した。なお、この会は今後臨時席かれる予定である。

## 中村元東大助教授の欧米インドの視察談をさく

かねてスタンフォード大学の客員教授として招かれていた中村元東大助教授（印西博攻）が、帰途ヨーロッパ、インドを通過して訪問されたので、学会では十二月九日その視察土産談を中研会議室で聞いた。

アメリカ、イギリス、西ドイツなどの中研研究者の動向から、各国における華僑の生活、インドの社会などについて、非常に興味ある報告があり、ことに各地の華僑が在留日本人と要なり、いかなる場合にも民族的な誇りと確信をもつて生活していること、インドにおける中国の影響、たとえば張友蘭がニューデリーで中国の新しい哲学を講義し、それがイタリヤの東洋研究誌にのるなど、中国の新文化がインドを媒介としてヨーロッパに影響しているなど、また、シンガポールにおける排日気分など、生々しいニュースでアジアの新しい動向を示すトピックであった。

## 学会掲示板

（おわがい）学会員諸氏の属される研究機関、学会、サークルの動きを是非この欄に掲げ掲載下さい。テーマや、問題点のみでも結構です。各地の各大学で発行の学術機関誌、あるいは研究会サークルの機関誌、および学会報との交換にも是非、積極的に御協力下さい。

### ★ 毛沢東三凡整頓会議会

毎週火曜日、PM三時より東大平野研究室を繰りまわす。会場、時間などの変更が考えられますので、新しく参加を希望される方には、中研内、松本、あるいは新島に連絡して下さい。テキストはプリントが用意されております。

### ④ 中国経済研究会

昨年末の打合せで、今後の研究会は沈志遠「新民主主義経済論」（青木文庫）をテキストにし、これに当面の建設の諸相を報告として加えながら、新民主主義経済の基本法則を明らかにしてゆくこととなった。

なお、この研究会には、ソ同盟、東欧人民民主主義諸国の研究者の参加も予定されている。日程、一月十七日から毎月廿一才三才一才四才場所、中国研究所会議室にて（連絡者中研佐藤）

## 魯迅研究會

依年の六月三日から、魯迅に學ぼうとする青年が集つて魯迅研究会を作った。始めはかなり散漫で、ばらばらに動き出したのであるが、やがて共通の道を辿り始めた。それは魯迅の姿勢に迫り、自分の生き方を正そうとする方向である。——操解をさけるために「姿勢」というコトバを説明すれば、これは不自然な「ポーズ」のことではなく、現実への立ち向かい方である。

「立場」「世界観」「態度」といったコトバでも云われるが、我々はもっと動的な「迫力」をもつコトバとして「姿勢」というのである。——自分の姿勢が悪ければ、決して魯迅をうけとめられないだけでなく、魯迅が我々とは無縁になる。魯迅を刻々によみがえらせることが、我々の研究会の目的である。

この「姿勢」を意図し始めて、研究報告、或は紹介を中心とするやり方から、原典に直接ぶつかって魯迅の姿勢に迫る「会談」を主に、報告、研究を従にするやり方に変えた。一人が問題提起をし、皆が一応の結論に達する迄積極的に発言して、原典の理解を確めることを「会談」と名づけた。

研究会は、毎週木曜日午後五時から神田東方

学会ビルで行っている。魯迅を學ぼうと思われ方は参加して下さい。二十二日は機関誌一号の合評会。二十九日は「魯迅と中国文学」の報告を予定している。なお「無花果の蜜を食ふ」終了後、「現今的新文学的概観」(向理提提君、宅見)の会談に入る。

機関誌一号について

今迄の成果を、ささやかながらもまとめて一月に才一号を発行した。

編集は会談の記録を主とし、研究会で発表された会員の報告を加えてある。会談の記録は討論の一応の結論をまとめたものであり、それ以外の論文は、今後会員の討論の材料とされるものである。幸に学会員諸兄の批判と感想が得られることを期待する。

会談部より、魯迅研究会の機関誌「魯迅研究」(B5版一八ページ)購読希望の方には、一部につき二八円(送料とち)を添えて学会事務局まで申込んでくださればお送りします。

## 中国近代史研究会(仮称)の発足

最近中国の歴史や、文化の研究を志す若い人々の間で、従来の分版し、孤立していた傾

向から抜け出て、共同して仕事をしたい、という気運が高まり、現実との対決の中から、中国の近代史に対して問題を投げかけ、そこに創造的な近代史を書き上げようという野心の下に、とりあえず、現在卒業論文作製の学生の人々の研究発表から例会をもちに至っている。昨年末始めたばかりで一回しかできなかったが、その十二、三人の人々の真剣な討議の中にも、この会の新しい方向を感じることができた。

才一回は十一月二十七日、中研会議室で、東大の小山正明氏が「広東絹織業について」平英団との関係をも見直しながら報告された。かつて日本資本主義論争はなやかなりし頃、幼方直吉氏によってものされた南京木綿の研究を反響き、内外の豊富な資料を駆使しつつ、幼方氏批判の上につけて中国マニファクチュアの研究を一步前進させるところがあった。ここに従来の推測されるにすぎなかった広東絹織業の奥底も始めから明らかにされ、外輸進出に伴って引起された中国絹織業の変遷の過程が具体的に分析されたことは、大きな成果であったといわねばならない。ただ平英団との関係については、その面での内部的分析、或は、広東近傍における農業経営の向題等が明らかにされる必要がある